
斎王代とヴァンピール、それからお菓子

さい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

斎王代とヴァンピール、それからお菓子

【Nコード】

N1679L

【作者名】

さい

【あらすじ】

【前後編】 純和風下ぶくれ気味の幼い巫女と、嫌々雇われた傲慢な吸血鬼青年の、お菓子を挟んだある日のやりとり。糖分はほんの少々です。

01・斎王代とヴァンピール、それからお菓子【前編】

「ん？ …… アンドラーシュ、か？」

御簾の内から気配を問う声がした。人間の子は、時々妙に勘がいい。

蒸し暑い夜闇の中、点った灯りが、簾（すだれ）の内側を透かしている。傾いた幼い肩から黒髪が滑り落ちる様子まで見える。

ナジ・アンドラーシュ。日本移民で彼の名を正しく発音出来るのは、若干八つの彼女だけだ。アンドラーシュとしては、鼻を鳴らして彼らを馬鹿にしたいところだが、実のところ日本人街の識字率は高い。様々な欠点はあれ、彼らの教養好きは確かだ。そしてとりわけ御簾の内側の少女は特別だった。この杜（もり）に巫女として仕える今世の斎王代（さいおうだい）は、珍しい早熟児であり、一歳の頃には大人と会話が出来たと聞く。

白木造りの家屋に似合わない豪華な金髪を揺らして、アンドラーシュが灯りに近づくと、その瞳は血赤から蒼へ色を変えた。吸血鬼（ヴァンピール）の不気味な身体特徴だ。

だが本人はそれを一々自覚も気遣いもせず、無造作に御簾を巻つて中を覗く。

「入るぞ」

「ええっ？ あ、ま、待つ」

「…… 斎王代。お前は」

苛烈に眉を顰めた顔は、元が端正で甘い造りなだけに、やけに残酷そうになる。

アンドラーシュに睥睨された斎王代は飛び上がり、慌てて手元を隠そうとして結局果たせず、しまいに溜息について誤魔化すことを諦めた。

「どうも、そなたは動きが早すぎる」

幼い指が押さえた本は、分厚い紙束にびっしりと文字が埋まっている。幾ら日本移民でも、そこいらの子供が挑めるものではない。

頭の発達はやいのだろうが、この子供が訳も吸血鬼をけろりと受け入れている『疎さ』は、やはり世間知らずの八歳児らしい。大陸全土で疎まれ恐れられる者達の噂を、聞く術もないのだろう。

「僕はそこを買われて、こんな辺鄙な所で雇われる羽目になったんだ。文句があるなら、政府（アドミラル）に言うんだな」

片やのアンドラーシュは、彼女の五倍近くの年を経ていた。ただし成長は人間の半分、寿命は倍ほどだから、未だ年若い青年だ。白暫で視線の強い、吸血鬼らしい妖しいまでの美貌を持ってもいるが、幼児相手ではそれも空しい。

「夜更かししたいなら、後見の僕への厭味を止める」

「したが、わたしは風邪など引いてないのだぞ。今日は昼も大人しくしていたのだから、本をめくるぐらい良いではないか」

ちんまりと畳の上に座った少女の、餌を貯めたリスに似た下ぶくれ気味の小さい顔が、眉根にぐぐつと皺を寄せる。

「……真似をするな」

ほとんど杜に閉じこめられて暮らすこの子供は、本が好きだ。

世の中、本自体決して安価ではない上、ここの蔵書は彼女らの祖国で出版された古いものになる。場合によっては一冊でひと財産だろう。それでも後見役の方針で、彼女は好きに読むことを許されていた。

斎王代は年頃になれば代替わりとなるため、それもあと何年かの自由だろうが。

「子供らしく動かないから、夏負けで食欲が無いなんて無様を晒すアンドラーシュは冷たく決め付け、かさと紙袋を突き出した。対する斎王代はキツイ言葉を気にした様子もなく、首を傾げながら受け取る。」

「うん？ これは何じゃ」

子供は中を覗いてしばらくは黙っていたが、やがて驚いた顔でぱつと上向いた。

「これは……もしや、そなた、あそこまで行つて来たのか？」

吸血鬼は煩そうに、問いかけを無視した。袋の中身は外で買った。米で作った他愛のない、安い菓子だ。

見掛けは原材料そのままで、アンドラーシュの目にはどうにも貧相な代物に見えた。だが斎王代は、温もりが残る袋を大事に抱えて、それが何よりの宝のように丸い目を輝かせている。

「た、食べても良いかつ？」

適当に頷けば、嬉しげに袋の中を掻き回す。

見たことがないほど無邪気な仕草に、アンドラーシュが内心驚いていると、彼女は得々と蜜で引つ付いた菓子の塊を取り出してみせた。

「ほら、ほら。こうゆうところが、美味しいのだぞっ」

「あ、ああ」

「……そうじゃ、アンドラーシュも食べる、か？」

惜しそうにその塊を差し出され、即刻、迷惑顔で断る。

俗信とは違い吸血鬼は普通の食事も取るが、菓子にしてまで米を食いたいとは思わない。

片ひざを立てて座る吸血鬼からさっさと菓手に視線を戻し、斎王代はぱくりと口に入れた。

「うむ。美味しいのう。うふふ、確かにこうゆう味だったのう」

特別気にしていた訳ではないが、最近の食欲不振など忘れた顔でいる子供に、吸血鬼の苦笑が漏れた。

02・齋王代とヴァンピール、それからお菓子【後編】

齋王代が移民街から巫女として連れてこられたのは、三つの歳と
いう。

「通りの先が駄菓子屋での、母がたまに買ってくれるのが楽しみであつた」

大概はその頃の記憶など朧になるものだろうが、この子供は、今も生家や辺りの町並みをはっきりと記憶に残しているらしい。話のついでに筆を取った地図は、建屋が様変わりした五年後の今も凡その案内にはなつたくらいだ。そこはぺらぺらの物小屋めいた木造が立ち並ぶ、色町に隣した場所だった。飢え売られることのない立場に選ばれた少女は、いつそ幸運だったか。

「恐らく生まれつき言葉が早かったがために、審神者（さにわ）達に候補に選ばれたのである」

アンドラーシュが杜に来たのは半年前。その後、ふと齋王代制度を揶揄した吸血鬼の言葉に、彼女は素直に頷いた。他言はならぬがと付け加える。

「わたしに特別な霊威などは、ないと思う。薄々知ってはおつたろうが、秘密だぞ」

「……念を押さなくても、僕はここの政治争いなんかに興味はない。そして吸血鬼の言葉をまともに聞く者もない。」

世慣れた後見役の影響が、崇められて増長することのない齋王代は、かえって小賢しいといえ小賢しかった。この子供は、杜の儀式や自らの役目、生活様式といったものの歴史が、ほぼ天変地異後に作られたことまで理解している。

……子リスか子ネズミのように、無心にもぐもぐ菓子を噛む今の顔には、賢さの片鱗もないのだが。

「本当にアンドラーシュは食べぬで良いのか？」

適当に買ってきて与えた米菓子が、よほど気に入ったらしい。嬉しそうに頬張っていたのが、ふと気が咎めたのか念を押されて、アンドラーシュは鼻を鳴らす。

「良い。まったくもって欲しくない」

「したが、あの街はここから随分遠いのではないか。夕飯には間に合ったのか」

「それは何の侮辱だ？ 僕はお前と違って子供でも世間知らずでもない、食事ぐらい自分でどうとでもする」

アンドラーシュが飛び地の移民街へ足を向けたのは、暇だったからに過ぎない。

神祇官らに突然物忌みだの意味不明の理由で追い出され、だが明日には帰ってこいなどと勝手を言われて、腹立ちを紛らわしに遠出をしたのだ。人間の足なら戻るのに朝まで掛かっただろうが、生憎と、彼の足ではそこまで時間が持たなかった。菓子を買い求めたのもただの気紛れだ。

「今日は無理に外にやって、すまなんだの。爺に聞いたが、朝方、杜の何処かで誰ぞが怪我をしたそうだ。恐らくはそれでだろう」

「あいつら、僕がそれで血に狂うと？」

アンドラーシュの瞳孔が、すっと細まる。

彼らを化け物と呼んで忌む者はまず想像しないが、一族が人の血を求めるのは、血液成分の欠陥を補うための薬食いに近い。昔流行ったという数々のフィクションと異なり、吸血行為自体で人を殺すこともない。相手が死ぬほどの血、液体を一気に飲む内臓の持ち合わせはないのだから当然だ。

だからこそ群れず、騒ぎを起こさなければ存在を黙認されている

……人間の役に立つ限りは。

「迷信深いものも多いのだな」

「迷信俗信他宗教、お前らは本当に何でもアリだな」

「八百万の神と言うからのう。ところで神祇官ら、建前はわたしを

護るためと言いながら、何人かは早々に逃げて一日杜に出てもこなかったそうだ。爺が笑っておった」

光景が目に見え、アンドラーシュは嘲笑する。

「そもそも僕は、お前の護衛に雇われているんだろが」

「うむ」

「護衛を遠ざけて何かあれば、誰が責任を取るつもりなのか……」

お前は小さい、ちょっとしたことですぐ死ぬだろうに」

「怖いことを言うでない。それにわたしはもう小さくない」

斎王代は菓子を食べるのを止めた。

両手を合わせる日本人街お馴染みの儀式を済ませ、手元で丁寧に菓子袋の口を折る。

「旨かった、馳走になった。アンドラーシュ、有難う」

続いて、さて残りはどこに締まっておけば見つからぬかのうと真面目に悩んでいる。

「ドングリと一緒に、木のウロにでも隠しておけ」

「何の冗談じゃ、それは。意味がわからん」

「お前は他人に自分の寝室まで掃除させているから、そうゆう事になる」

「それは今更じゃ。にしても、ああ、本当は全部食べてしまいたい。でも明日の朝餉が入らねば、きつと騒ぎになるうのう」

未練がましく袋を眺めている姿は哀れを誘う。とはいえ袋を預かってやるほどの親切心は芽生えず、アンドラーシュは付き合いきれないとばかりにその場から立った。

「もう行くのか？」

「僕にまだ居てほしいのか？」

子供だな、と目元に嘲りの笑みを浮かべる。

何故だか意地の悪そうな顔をすればするほど、この吸血鬼の美貌は凄みと艶を増す。その瞳に見下ろされれば、八つといえどもやはり女だ。斎王代は一瞬、恥らうか腹を立てるか決めかねるといふ表

情になった。

それから急に悪戯顔をして、ふんと鼻を鳴らす。

「それはそうじゃ。アンドラーシュの傍におれば、不思議と一匹も蚊が寄って来ぬからのう。どうせなら、一緒に寝所におってくれば助かる」

「……巫女がふしだらなことを言っな」

咄嗟に咎めてアンドラーシュは後悔した。吸血鬼が幼女に真顔で言う台詞ではない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1679/>

斎王代とヴァンピール、それからお菓子

2010年10月8日13時58分発行